

「おさしづ」第5巻における刻限と「道」

『おさしづ改修版』第5巻(明治33～34年)の年代は、内務省宗教局長の「教義等も十分に組織して、充分の準備を整えて掛からねば到底駄目だ」との言葉を受けて、一派独立を目指して進められた年代である(『稿本中山眞之亮伝』第5章)。

第5巻には刻限の「おさしづ」が9件ある。そのうち、「道」が用いられるのは8件、3回以上「道」が繰り返して用いられるのは6件である。刻限の「おさしづ」の件数は年を経るごとに減っているが、第5巻では年平均4.5件であるから、同4件であった第4巻と同じような状況である。「刻限出難くい論し難くい。そこで取次事情に論ず。」(さ33・2・12 榊井伊三郎、母きく、安松三人共身上によりその理に付願)とあるように、取次人の事情願にも「刻限同様の話」を論ずとされている。以下、刻限の「おさしづ」において説かれている「道」の用例を確認する。

神の道に嘘は無い

第5巻における最初の刻限の「おさしづ」は、「お前等何を待つて居るぞ。今晚で二晩も夜明かし。さあ〜皆の者、何を待つて居る。」との言葉で始まる。

「神の道に嘘は無い。嘘に旨いものは無い。勇んでくる。嘘やない。結構台である。これだけ論したら何ぼ書物に出そとまゝや。書物を起そとまゝや。……皆々の心、真実という心、十分真実欲しい。これまで真実よこさきり、あちらこちら苦しみの中に、道を拵えて来たる。」(さ33・9・9 刻限(本席の御身上前日より大変御障りの処へ刻限の御話あり、本部員一同拝聴す))

この明治33年の8月1日から中西、井上、逸見といった学者の協力を得て、天理教教典などの教義書が編纂され、9月7日には、天理教教規、天理教教典、天理教礼典、教祖系伝、教務本末が、同24日には教典積義、御神楽歌積義が、第1回の独立請願の添付書類として追加提出されている。この「おさしづ」の冒頭で「今晚で二晩も夜明かし」とあるのは、9月7日・24日の追加提出と関係があると思われるが、「神の道に嘘は無い」と言われ、これまで真実の心でもってあちらこちら苦しみのなかに道を拵えてきたと説かれている。書物を作り、体裁を整えるが、神の道に大事なことは真実の心である、と諭されている。その成り立ってきた「道」については、数日後の刻限の「おさしづ」で次のように論されている。

「どういふ道から成り立ったる。最初という、三十七年前、その前又長い。三十七年後の者知ってる者一つも無い。ほんの、話にそうであったそうな、と言うだけ。実際見た事は無い。難儀苦行の道は分からん。よう聞き分け。三十七年古い俺等どうや、俺等こうや、影姿無かった。後々難儀は話だけ。皆心に治まってないから、聞いたゞけ。今勢から取り締まり、万事仕難くい。……これこんなぐらいで神の道止まりて了てはならん。……どんな事あつても動かんは、神の道〜。どうなりこうなり、その日来たい。又そこえ〜、土台出けたる〜。あちらにこちらにも、土台出けたなあという。こら雇うてするやない。又価出してするやない。これは天然の理として独り出て来るで。」(さ33・9・14夜9時 刻限の

御話)

この「神の道」は、本席が入信された37年前(元治元年)、さらにその前にはじまり、「難儀苦行の道」と言われるほど難しいなかを通り抜けてきての今がある。しかし、今やそのことを知っている者がいない、話に聞いているだけで、心に治まっていない。そうして、今の情勢にとらわれて判断をしては、万事うまくいかない、と言われる。「神の道」の土台は、道のはじまりから艱難のなかを真実の心を寄せ合ってきたことにある。この道の歩みは、人を雇って対価を払ってするのではない。真実の心の上に天然自然に積みあがっていくべきものであることを強調されている。

存命教祖の道

このように、この道が元々どのような道であったかということが繰り返して説かれる。

「このやしきは、一人力ひとりちからで出けた道やない、道やあろまい。艱難から組み上げたる道。よう聞き分け。それ〜見分けてくれにゃならん。たゞ車の水仕掛けたら、独り回る車のようおやさまに思てはなるまい。……存命教祖の道、あれも変えにゃならんこれも変えにゃならん、というは、神の残念々々。よく聞き分け。……何邪魔になる。邪魔になれば、道伏せ替え出けやせん〜。道変わりて了う。変わった事、世上にやり掛けた事行きやせん。この道人間心で色品変えてやってみようと思たとて、そりゃ行きやせん。」(さ33・10・16夜9時半 本席身上俄かに胸なり腹背痛み、それより刻限のお話)

ここでは、「艱難から組み上げたる道」と言われ、それは「存命教祖の道」だと表現され、この道が盛況になっているのを当たり前のように考えてはいけないと諭される。この道は存命の教祖がはじめ、今も導いているということを示唆されて、あり方を、その時の都合や人間心で変えていいものでも、変えられるものでもない、ということが繰り返して説かれている。

「何ぼ言うても論しても聞き容れにゃ、道がびつしやりと消えて了う〜。……この道始め家の毀ち初めや。やれ日出度い〜と言うて、酒肴さけさかなを出して内に祝うた事を思てみよ。変わった話や〜。さあ〜そういう処から、今日まで始め来た〜。世界では長者でも今日から不自由の日もある。何でもない処から大きい成る日がある。家の毀ち初めから、今日の日に成ったる程と、聞き分けてくれにゃならんまい。」(さ33・10・31午前2時 刻限御話)

さらに、このように厳しい言葉で、この道のはじまりに立ち返り、親神の守護があればこそ今日があることを聞き分けるように諭されている。

このように一派独立運動のなか、第5巻における刻限の「おさしづ」では、「この道」(神の道)の来歴が説かれ、その場その場の都合に合わせて形を整えるというようなことではなく、この道のはじまりに立ち返り、教祖によって付けられてきた道に真実を尽くすことによって歩みを進めるように諭されている。